

お世話になった日本赤十字社臨床衛生検査技師会の皆様へ

青春の咆哮

前会長 笠井直幸

私物の荷物の中から表紙がバラバラの古い大学ノートが出てきた。コピーもない時代に参考にしたいと書物からの抜粋を手書きで写し取ったものだ。薬品による腐蝕のためか元の姿はなく今の私の姿にどこか似ていて愛しくまた懐かしい。ページの間から当時使っていた緑色、赤色の薬包紙がでてきて、所々薬品で字が読めず、懐かしさが一層つる。

去る平成11年3月末日をもって38年間お世話になった姫路赤十字病院を定年退職しました。

顧みると生まれ育った土地である神戸で勤めた神戸掖済会病院を去り、姫路赤十字病院に第3人目の技師として着任し、赤旗が立ち並び扉く門を潜ったのは25才の初夏だった。若き青春真只中に世の中の矛盾を知らされ労働運動にのめり込んだが、30才を境に技師として技術に生きようと決心した。

遅れている姫路赤十字病院の検査を真剣に考え、吉川浩二内科部長、松永剛典小児科部長両先生の指導を受け、当時、日本にキットなるものがない時代だったのでアメリカのクリニカルケミストリー等の文献を翻訳し、術式をルーチンに乗せることが私に与えられた仕事でした。

来る日も来る日も翻訳、試薬単品を外国から入手、実験の繰り返し、子供の参観日には学年を間違えて教室を訪れたという笑い話があるほど、仕事に夢中になったものだった。

昭和50年を契機にオートメーション時代に突入し得意だった動物実験の蛙、兎を使う妊娠反応も姿を消し、技術の見せ場が少なくなった。

機器の選択とシステム思想の構築、精度管理が主たる仕事に変わってきた。電気生理分野の発展がめざましく日進月歩した。

臨床検査技師にも患者ベッドサイドでの役割が多くなり、この点は非常に喜ばしいことだと思う。

私の技師生活は良き時代だった。技師を生めよ増やせよの経済効率のよい検査黄金時代に、私の好きな実験を中心にした用手法時代に巡り逢えた。時代が求めた仕事にまた私の求めた仕事でもあったという、思えば幸せな人生だった。

目標の方向を失った混沌とした医療の中で明日の医療、明日の検査に向かって精進している皆様、安易な人生を願うよりも、どんな人生も笑顔で乗り切る強い人に。自分にふさわしい仕事を願うよりも、与えられた仕事を果たすに必要な力を祈り求める人になって欲しいと願って居ります。

一生の終わりに残るものは、与えられたものではなくて与えたものであると信じるからです。そして今、病院を去った後、我が青春は、黄金の残照に向かって咆哮する。命ある限り我が青春は、咆哮を続けるでしょう。